

「実践報告」

## 絵本の読み聞かせを活用した外国語活動の授業実践

野口 将信（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

倉田 伸（長崎大学教育学部）

篠崎 信彦（長崎大学大学院教育学研究科）

呉屋 博（長崎大学大学院教育学研究科）

本実践研究では、「外国語活動の授業において、英語絵本の読み聞かせの活用は、児童の発話が活性化されるために有効である。」という仮説のもと、外国語活動の授業において、同じ絵本を3回くり返す読み聞かせを行った。その結果、児童の様子に読み聞かせの効果を伺わせる変容が見られた。また、学級経営の視点からQ-Uの結果にも向上が見られたため、外国語活動の授業改善が、児童同士のつながりの仕方に、何らかの影響があったのではないかと考えた。

キーワード：英語絵本 読み聞かせ くり返し効果 発話 コミュニケーション活動

### 1 研究の背景

#### 1.1 外国語教育における新学習指導要領

文部科学省は、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表した。

平成32年度から実施される新学習指導要領によると、5・6年生で年間70時間行われる外国語活動は「読むこと」「書くこと」を含めており、教授法の改革を余儀なくされることが予想される。3・4年生で新たに年間35時間行われる「外国語活動」は、これまで5・6年生の外国語活動を前倒しする形になる。小学校の教育現場に「英語教育改革」という大きな波が押し寄せてきている。

#### 1.2 教員へのアンケート調査

研究を進めるにあたり、長崎県の小学校教員を対象に、「外国語活動に関するアンケート調査」を行った。これは、「授業の内容」「授業への意識」「児童の様子」「絵本の読み聞かせの経験の有無」等について、私の身近な教員の意識を問うものである。

**【教員へのアンケート調査の結果】** ※平成29年2月実施 51名対象

絵本の読み聞かせについては、約80%の教師が「知っている」と答えたことに対し、実践をしたことがある教師は、約37%にとどまり、その回数もほとんどが1～3回程度という結果であった。読み聞かせを行っていない理由としては、「発音への自信のなさ」「練習時間が確保できない」「選書の仕方がわからない」などが挙げられた。読み聞かせはまだ一般化されていないことがわかった。読み聞かせの効果については、「聞く力」「想像力」「音声への慣れ親しみ」「興味関心を高

める」など多様な意見が出された。読み聞かせでもっと知りたいこと、課題、疑問点などで多かった意見が、「選書の仕方」「絵本の入手方法」「活用法」であった。また、「発音」などの技術的な不安も多く挙げられ、「読み聞かせの効果について知りたい」という意見も複数見られた。「絵本の読み聞かせ」については、興味はあるものの、発音への不安などから実践には抵抗があるということが伺えた。

## 2 研究の概要

### 2.1 研究のねらい

英語絵本の読み聞かせ研究については、近年様々な試みが行われてきた。

松本(2015)は、Eric Carle による「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?」の大型絵本を使用し、“Children, children, what do you see?”という英文が、絵本の中だけの問いかけではなく、聞いている児童への問いかけとなり、真にコミュニケーションの役割を果たすことを言っている。

外国語活動の授業では、「英語のあいさつ」「英語の歌やチャンツ」「ゲーム」「発音練習」「会話練習」は、一般的に行われているようだ。しかしながら、「読み聞かせ」の学習効果については、その効果の可能性に気付きながらも、積極的に行われているとは言えない現状がある。アメリカでベストセラーになった、「読み聞かせハンドブック」の著者であるジム・トレリース(1987)は、読み聞かせは、子どもの興味、情緒的発達、想像力を刺激するほか、子どもの言語能力を刺激するものとしている。今井・坊井(1994)は、幼児に絵本の読み聞かせをくり返すと、心情理解が促進されると報告しており、絵本の読み聞かせが幼児の共感性を育てる有効な方法のひとつであることを明らかにしている。本研究において、絵本読み聞かせを活用した授業実践を行い、「読み聞かせ」を外国語教育の指導法の一つとして、活用することによる学習効果を明らかにすることをねらいとする。

### 2.2 研究仮説

以上から、研究仮説を以下のようにした。

#### 研究仮説

外国語活動の授業において、英語絵本の読み聞かせの活用は、児童の発話が活性化されるために有効である。

英語絵本の読み聞かせを実践する中で、児童のつぶやきや反応が多く見られた。そこで、絵本の読み聞かせが、児童の発話を促すために有効ではないかと考え、この仮説を設定した。ひいては、絵本の読み聞かせは、英語理解や異文化理解を促進するために、大いに有効であると考えられる。

### 2.3 発話を促す取組

萬谷(2009)は、「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」において、英語発話を引き出す教師の談話手法として、子供の発話を賞賛し認めることがきわめて重要であること、さらに日本語よりは、英語によって問いかけることが有効であることを示した。また、読み聞かせの回

数によって発話量が増加し、教師は子供の力の伸びを見極めながら子供の発話を引き出す工夫をしていることも明らかにした。

本研究では、ただ絵本を読み進めるのではなく、「児童の発話を促す」ことを中心に、児童とのコミュニケーションを意識しながら読み聞かせを実践する。

本研究の実践報告として取り扱う読み聞かせは、「一つ的话题を、3回くり返して読む」について「授業の導入として」取り扱った実践について報告することとする。基本的な読み聞かせの仕方は次の4つの観点を基本にしているが、今回仮説を検証する方法として、①～③の3つの観点到絞った。

- ① ジェスチャーをつけながら表情豊かに読む。
- ② 時折質問をしながら、児童の発話を促す。
- ③ 繰り返しなどがある部分は、一緒に読み進める。
- (④ 次の話の展開を予測させながら読む。)

また、物語に出てきたものや文化、言葉などについて、ALT（外国語指導助手）等に質問することにより、児童の「英語理解」や「異文化理解」を深めるきっかけにする。

#### 2.4 くり返しの読み聞かせの取組・検証方法について

本実践研究では、くり返しの絵本の読み聞かせは、英語の言語習得の過程で、子どもの言語能力を刺激する効果が高いのではないかと考えて取り組んだ。

##### (1) 3回の読み聞かせの取組について

くり返しの読み聞かせを取り組むにあたり、4時間構成のうち1時間目から3時間目の導入10分間において、絵本の読み聞かせを取り入れることにした。

##### (2) 授業の概要

- ① 期 日 平成29年9月5日（火曜日）～9月26日（火曜日）
- ② 対 象 長崎市立N小学校 5年生24名（男子13名、女子11名）
- ③ 単元名 Lesson7 What's this? (Hi, friends! 1 文部科学省)
- ④ 使用絵本 GOODNIGHT MOON（マーガレット・ワイズ・ブラウン作）

##### (3) 読み聞かせの方法（3回くり返し）

児童は大型モニターに提示された絵本を見ながら、教師の読み聞かせを聞く。

【第1週】絵本をそのまま読む。（発音や意味を確認しながら言葉の面白さに気付けさせることをねらいとする。）

【第2週】“What's this?”の表現を使いながら、その対象が何であるか質問しながら読む。（“What's this?”の表現に慣れ親しむことをねらいとする。）

【第3週】「その物が好きか」「どう思うか」など、これまで学習した英語表現を使って、聞き手自身が考えたことを質問しながら読む。（聞く態度を培うことをねらいとする。）

##### (4) 検証方法

- ① 読み聞かせごとに、児童へ自由記述の感想を書かせ、内容を分析する。
- ② 2回目、3回目の読み聞かせ終了時に、「先生問いかけに声を出して答えることができましたか？」との質問をし、4件法で自己評価させる。
- ③ 読み聞かせをする前と、3回の読み聞かせの後に、16の単語について、単語理解テストを行う。（絵本の一部を見せ、わかる単語にはカタカナで記入する。）カタカナでの表記がほぼ正しい場合に、理解したとみなすこととする。
- ④ 読み聞かせをする前と、3回の読み聞かせの後に、外国語活動に関するアンケートを行う。

### 3 絵本読み聞かせの実践

#### 3.1 自由記述の感想分析

個人の感想の変容を見ると、1回目は、「知った」「驚いた」など、言葉との出会いに気付きや喜び、戸惑いなど、受け取り方に個人差が見られた。2回目になると、くり返しの効果が表れてきて、「わかった」「覚えた」などの感想が増えてきた。3回目は、「内容がわかった」「言うことができた」など、内容理解が深まったことと同時に、くり返しの読み聞かせが、「楽しかった」「おもしろかった」など、読み聞かせをくり返すことに肯定的な意見が多かった。

児童の感想の中に、発話に関する感想の数を取り上げたところ、右のグラフのようになった。1回目の感想では、「難しかったのは手袋を英語で発音することです。」「くしを英語で言うのは難しかったです。」と、発音が困難な単語に対するネガティブな感想が見られた。2回目になると、発話に関する感想を取り上げる児童が増え、「1回目より言える言葉が増えたような気がしてうれしかったです。」「前よりも発音が comb とよく言うことができてよかったです。」などと、できるようになったことに喜びを感じている感想が見られた。3回目の感想では、「1回目、2回目と比べて、3回目はだいたい覚えて声に出して言うことができたので、とても楽しかったです。」「もうほとんどの内容は覚えていて、いっしょに言えるようになりました。」などと、発話に積極的な様子が伺えた。

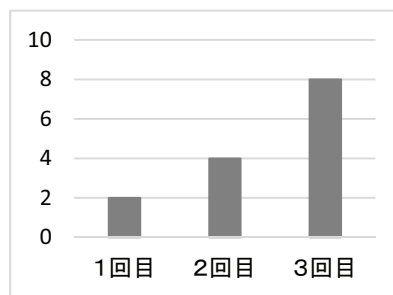


図1 発話に関する感想の数

#### 3.2 発話に関する自己評価

2回目、3回目の読み聞かせ終了後の、「先生の問いかけに声を出して答えることができましたか？」に対する児童の自己評価の結果である。1回目の読み聞かせでは、教師が読み聞かせながら、児童に大まかな内容を理解させることを目標に行ったため、児童に対する問いかけの場面はほとんどなかったため、1回目の自己評価は行っていない。2回目、3回目の読み聞かせ終了後に、4件法で発話について自己評価をさせた。

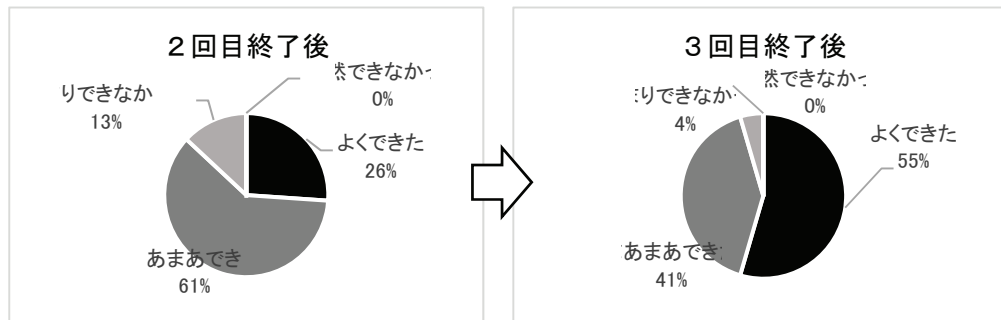


図2 2回目、3回目の読み聞かせ終了後の発話についての自己評価

2回目の読み聞かせでは“What's this?”の発問を中心に、そのものが何であるかを問いかけながら進めた。1回目の読み聞かせで、ある程度の内容を覚えていたため、ほとんどの児童が、それが何であるかを英語で答えようと意欲的に取り組む様子が伺えた。“comb”“mush”“kitten”など、馴染みのない単語に対しては、思い出せない児童が多く、戸惑っている場面も見られた。3回目の読み聞かせでは、「その物が好きか」「どんな動物が好きか」など、聞き手自身のことを尋ねる質問を入れるなど、児童とのコミュニケーションを行いながら読み進めた。その結果、「よくできた」の回答が55%と過半数になり、3回くり返し聞いたことにより、自信をもちながら読み聞かせの世界を楽しんでいるように思えた。

### 3.3 単語理解テストの結果

読み聞かせのくり返しによる児童の単語理解の状況を確認するため、読み聞かせを行う前と、3回の読み聞かせの後に、「単語理解テスト」を行った。これは、絵本の挿絵の一部から、英語でだいたい言える言葉にはカタカナを書かせ、言えない言葉には「×」を記入させるものである。表記がほぼ正しい場合に理解したとみなした。

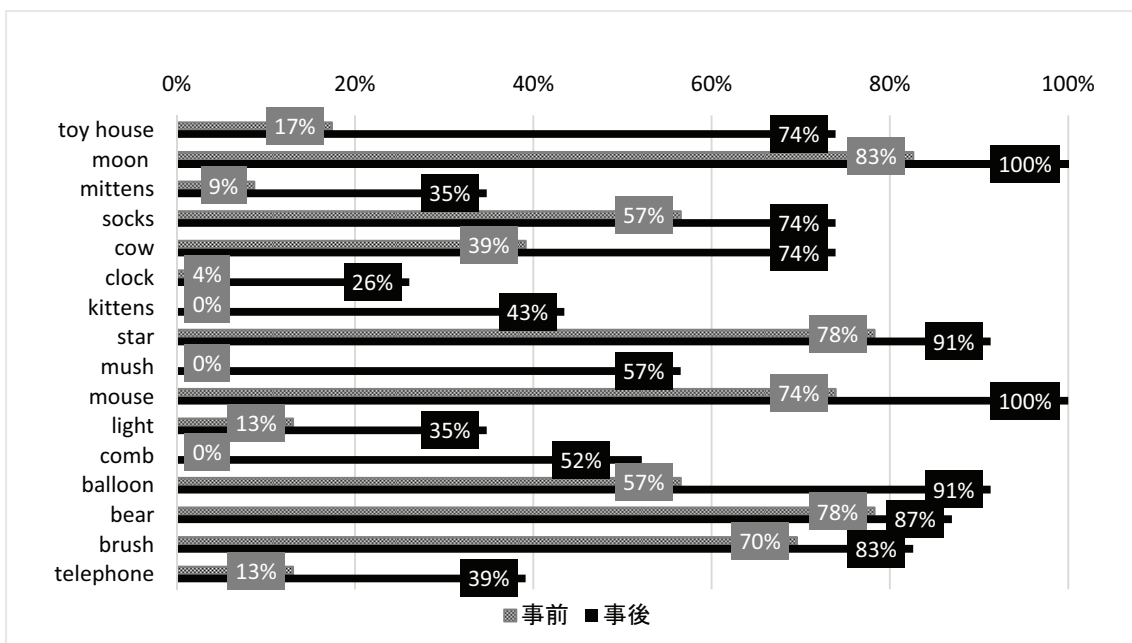


図3 単語理解テストの結果

全体平均理解率は、読み聞かせ前には、37%の理解率を示していたが、3回の読み聞かせ後の調査では、66%の理解率を示した。特に馴染みのない単語と思われる理解率0%の単語“mush”や“comb”も、読み聞かせ後は50%以上の理解率を示した。発話を支えるボキャブラリーが増えたと考えられる。

### 3.4 外国語活動に関するアンケートの結果

読み聞かせをする前と読み聞かせをした後に、児童の意識を確認するため、外国語活動に関するアンケートを行った。

#### ①「絵本読み聞かせ」にどれくらい興味がありますか？（4件法）

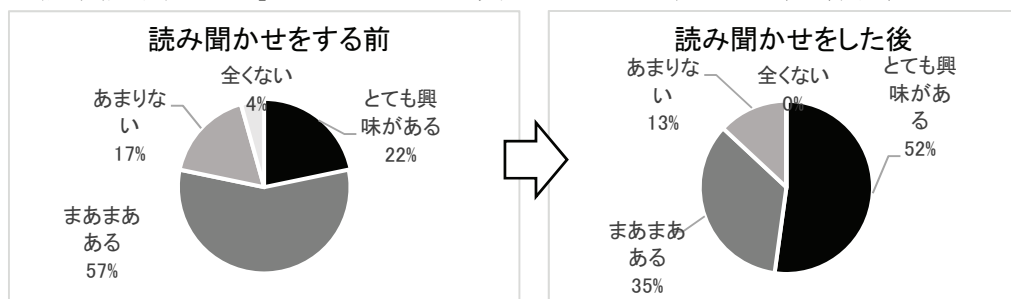


図4 読み聞かせに関するアンケート

児童は英語絵本の読み聞かせをあまり経験したことがなく、昨年度多くの児童は私が全校児童に向けた読み聞かせを聞いただけという程度の経験しかなかった。そのため、未知の世界に対する興味はそれぞれ違いが見られたが、読み聞かせを実施した後は、「とても興味がある」と答えた児童が半数を上回った。しかしながら、「あまりない」と答えた児童も依然として存在していることから、更に工夫が必要だと考えた。

#### ② 外国語活動は好きですか？（4件法）

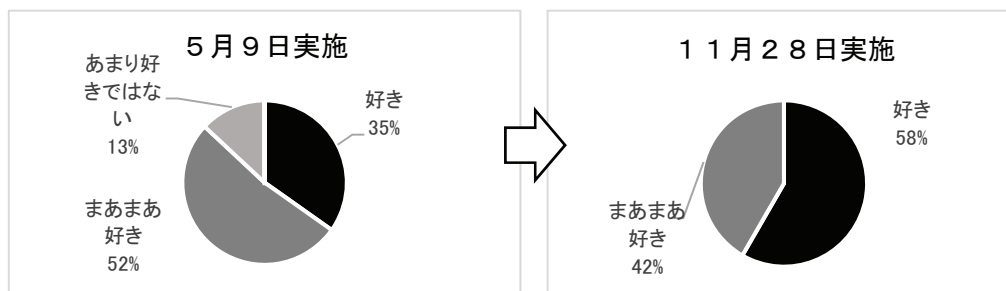


図5 外国語活動の授業に関するアンケート

外国語活動の授業に対し、新年度当初は抵抗を示す児童も見られたが、11月の時点では、好意的な意見に変化した児童が多いようである。外国語活動の授業改善による様々な取組が、少しずつ効果を表してきたように思う。

### 3.5 ビデオ分析の結果を踏まえた個の状況

ビデオ分析から、2回目の読み聞かせに集中できなかった様子のA児とB児の感想を取り上げたい。A児の感想を読むと、2回目は「難しかった」という言葉が見られた。つまり、発音や内容が難しいと感じることが児童のストレスとなり、授業に集中できなかったと思われる。3回目の読み聞かせでは2名とも発音にも自信がついた様子で、「わかってきた」という感想が見られた。B児は、「先生の



問いかげに声を出して答えることができましたか？」という問いに対して、2回目は、「まあまあできた」という自己評価であったが、3回目は、「よくできた」に変わっていた。また、A児の感想の中に、「先生より少し早く言うことができました。」など、発音に自信を持てたことにより、興味を高めた様子が見て取れた。

#### 4 学級経営の関わり

教職大学院で学んだ理論を実践に生かすことを目標に授業改善や学級経営に臨んだ。特に、「絵本読み聞かせの活用」を意識し、外国語活動の授業改善に取り組んだ。

#### 【Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）の結果】

学級経営の状況を判断するために、5月と10月に2回のQ-Uを行った。

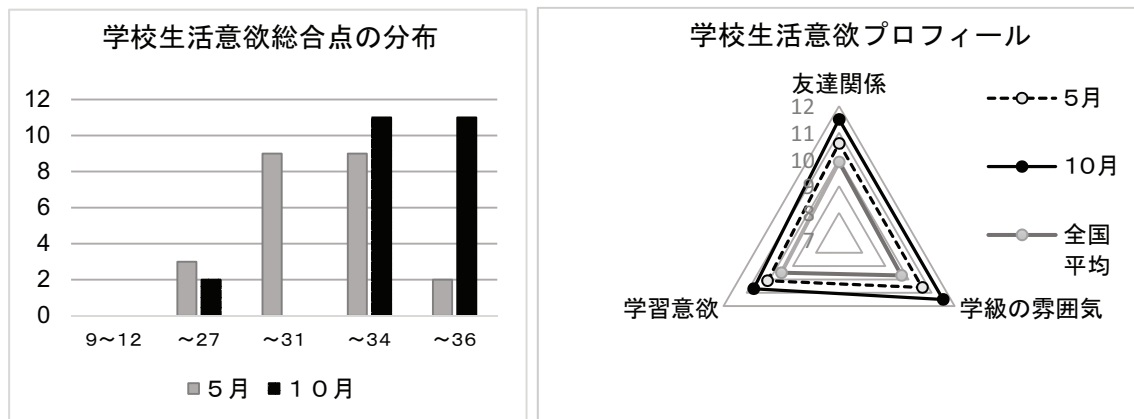


図6 学校生活意欲に関するQ-U調査の結果

学校生活意欲に関しては、ほとんどの児童で32点以上を示し、総合得点の平均値も、全国平均の29.1点を大きく上回る33.6点を示した。学校生活意欲プロフィールを見ると、「友達関係」「学級の雰囲気」「学習意欲」ともに5月より10月の方が向上しており、特に「友達関係」「学級の雰囲気」は12点満点に対して、平均11.5点と非常に高い結果であった。「学習意欲」に関しては、5月より10月の結果に向上が見られたが、比較的課題の残る結果となった。

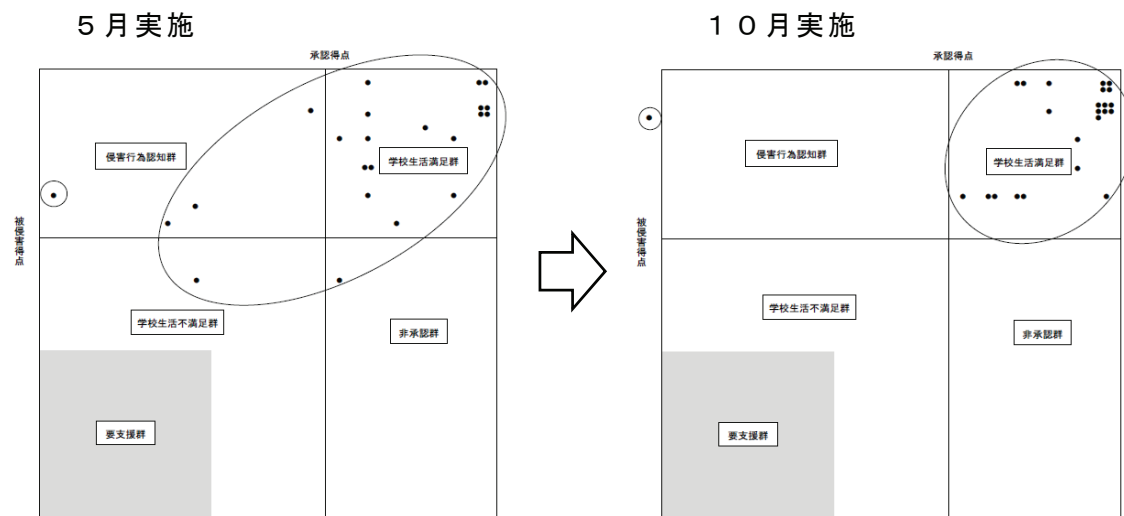


図7 Q-U調査による承認得点と被侵害得点の関係

「学級生活満足群」の属する児童が、5月は74%だったことに對し、10月は96%まで上昇した。これは全国平均値が39%であることと比べると高い結果だと言える。特に、5月に学級満足群から外れていた6名のうち、10月には5名が満足群へと移行しており、全体的に向上していることが伺える。

## 5 結果の分析と考察

自由記述の感想では、回を重ねるごとに内容理解や発話に関する肯定的な感想が増えていった。単語を「知った」「わかった」の感想に始まり、内容理解へと発展する様子が伺えた。また、発話に関する感想も回を重ねるごとに増え、発話できたことによる喜びや、自信を示すものが多かった。発話（教師の問いかけに対する応答）に関する自己評価において、2回目よりも3回目の方が「よくできた」と答える児童が増え、読み聞かせをくり返すことが、児童の発話力を高めることがわかった。くり返せば増えるということは、少なくとも1回の読み聞かせでも効果があることの確かめになったと考える。また、今回の読み聞かせの学習活動を通して、児童の多様なつぶやきや発言の増加傾向が見られたことから、読み聞かせは児童のコミュニケーションの能力を活発にすると考えられる。単語理解テストの結果から、くり返しの読み聞かせが、児童の単語理解力を高めると考えられる。ここでは、16個の単語のうち理解率は66%であり、個人差が見られたほか、8%の誤答が見られた。英語表現への慣れ親しみを深めるための更なる工夫が必要であろう。自由記述の感想、発話に関する自己評価、単語理解テスト等の結果から、くり返しの読み聞かせは、児童の発話を促す手立てとして有効であるとともに、児童の英語理解力を促す可能性があると考えた。

Q-Uの結果から、児童は全体的に学校生活に対する満足度を高めていることがわかる。この結果は、様々な要因が考えられるが、とりわけ外国語活動の意図的な授業改善の取組は、児童に何らかのよい影響を与えたのではないかと考えている。

外国語活動の授業改善が、児童のコミュニケーション能力を高めるだけでなく、児童同士のつながりにも、何らかのよい影響を与えたことが期待できる実践結果であったと考えている。

### 【引用・参考文献】

- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 外国語編・外国語活動編』
- 松本由美（2015）『初期英語教育における絵本の有効活用 ―児童の自発的反応を引出す読み聞かせの試み―』玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要 第8号
- 今井靖親・坊井純子（1994）『幼児の心情理解に及ぼす絵本の読み聞かせの効果』奈良教育大学紀要 第43巻 第1号
- 萬谷隆一（2009）『小学校英語教育での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究』北海道教育大学紀要（教育科学編）第60巻 第1号



ジム・トレリース著 (1987) 『読み聞かせ この素晴らしい世界』 高文研